

研究概要

全体論

研究主題

であう・つながる・うまれるコミュニケーション（第4年次） ～学びを豊かにする聞き合い～

1 研究主題について

(1) 主題設定の背景

学習指導要領
「生きる力」の育成

私たちは、「生きる力」を育成するために日々の実践の中で基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、これらを活用して問題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育てていかなければならない。また、学習指導要領の中で述べられている言語活動の充実など改訂のポイントを踏まえ、日々の教育活動の充実を図っていく必要がある。

H21 校内アンケート
本校子どもの実態より

一方で、本校の子どもに目を向けると、以下のことが求められていた。

- ・自分で考え判断しようとする姿勢
- ・追求する意欲や根気強さ
- ・協同的な学習でのかかわり

前研究との関連
研究紀要第60集から第63集

前研究である「知識創造の力を育む授業」では、かかわりが個の思考に重要な役割を果たしていることを明らかにしてきた。かかわりは、学びの主体化や活性化を促し、学習の高まりを伴いながら学びのプロセスを充実させていく。そこで、子ども同士がかかわり合う学習活動を展開していくことで、子どもの思考力・判断力・表現力を効果的に育てていくことができると考えた。

かかわりの重視

研究の方向

本研究では、かかわりを引き続き重視し、集団での学びの向上に取り組んでいく。そして、子ども同士がかかわり合いの中で、思考力・判断力・表現力を育てていくことを研究の目的とした。

(2) 思考力・判断力・表現力

学校教育法第30条第2項

思考力・判断力・表現力は、「生涯にわたり学習する基盤」を培い、「習得した基礎的な知識及び技能を活用して課題を解決する」ために必要な力である。この力は、問題解決的な学習活動の中で培われていく。

本校では、思考力・判断力・表現力を、以下のように考える。

思考力・・・生活経験や学習活動などを通して得た知識を基に、課題の解決に向けて、比較・分類・関連付け・類推などを経て、新たな知識を発見・獲得する力

判断力・・・生活経験や学習活動などの中から、課題を解決するために必要な知識を抽出・選択する力

表現力・・・生活経験や学習活動などを通して得た知識に基づき、課題の解決に向け、自分の思いや考えを説明する力

(3) 研究主題 『であう・つながる・うまれるコミュニケーション』

思いや考え
事物事象に対し、思
いは主観的なもの
であり、考えは客観
的なものととらえ
る

根拠 理由づけ
トウルミン・モデル
から

研究主題
であう・つながる・
うまれるコミュニ
ケーション

問題解決に向けて取り組む際、子ども一人一人は、これまでの生活経験や学習活動などから自分の思いや考えをもつ。その思いや考えは個々の生活経験や学習活動などを根拠としたものであり、理由づけが弱かったり、学習問題に対して一面的な見方にとどまったりするなど、不十分であることが多い。そこで、他とかかわることにより、子どもは互いの思いや考えを伝え、受けとめ、新たな知識や技能、見方や考え方に気づき、自分の知識や技能、見方や考え方を新たなものにする。このかかわりの過程が思考力・判断力・表現力を育むと考え、研究主題を『であう・つながる・うまれるコミュニケーション』と設定した。

『であう・つながる・うまれるコミュニケーション』は、かかわりを通して子どもが思考力・判断力・表現力を育んでいく学習活動であり、「新たな考えにであう」「新たな考えにつながる」「新たな考えがうまれる」というかかわりの過程を示したものである。

2 研究副題について

(1) これまでの研究の歩み

研究紀要第 64 集
条件

話し合いの活動に
おける思考力・判断
力・表現力を育む手
だての根拠となる
もの

研究紀要第 65 集
聞き合い

双方向に思いや考
えを伝え・受けと
り・見つめ直す学習
活動

研究紀要第 66 集
受けとめ合い

互いの考えを双方
向に伝え受け取り
合う
見つめ直し
内省的に自分の考
えとかかわってい
く

1年次の研究では、話し合いの活動が思考力・判断力・表現力を育む『であう・つながる・うまれるコミュニケーション』となる条件を模索した。この条件については、かかわり、比較、思考の再構築、意欲、言語化、分析・選択などのキーワードに整理してとらえられた。

2年次の研究では、「聞く」を重視し、子どもが相互に働きかける互恵的な学習活動を「聞き合い」として研究を行った。聞き合いには「収集」「整理」「適用」といった三つの働きがあり、その働きに応じて適切な手だてを講じることができた。

3年次の研究では、聞き合いが「受けとめ合い」と「見つめ直し」の二つの要素から成り立つと考えた。集団での受けとめ合いから、個の見つめ直しへと向かう状態を見通した授業づくりを行うことで、集団の学びが個の学びへとつながった。

4年次は、聞き合いという集団活動の中で、個に着目して、聞き合いを通して、どのように個の学びを豊かにしていくのかを明らかにしていきたい。

(2) 研究副題 「学びを豊かにする聞き合い」

関係づけ
比較・分類などを通
して自分の考えと
他の考えとの関係
をとらえる

再構成

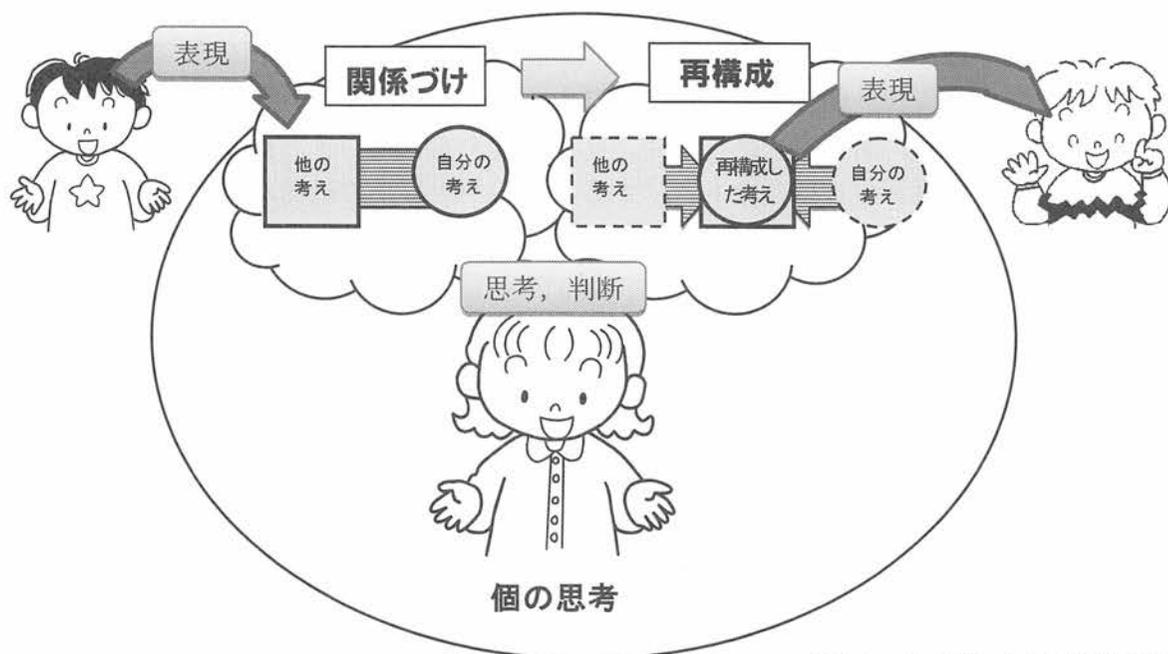
合成・選択などによ
って他の考えを自
分の考えに反映さ
せる

「学びを豊かにする聞き合い」とは、「関係づけ再構成」の繰り返しによつて、子どもの考えが広がったり深まったりする学習活動である。

この聞き合いにおいて、まず、子どもは他の考えを自分の中に受け入れる。次に、自分の考えと他の考えとの関係をとらえる「関係づけ」を行う。そして、他の考えを自分の考えに反映させる「再構成」を行う。子どもは、自分の考えと他の考えを関係づけ再構成することによって、多様な考えを得たり、新しい考えを生み出したりする(資料1)。この関係づけ再構成された考えを他に表現することで、他がさらに、関係づけ再構成をする。このような聞き

聞き合いにおける
個の思考
考えを関係づけ再
構成すること

合いにおける個の思考が繰り返されることで、考えが広がったり、深まったりすると考える。



資料1 聞き合いにおける個の思考

4年次は、聞き合いの中で関係づけ再構成する個の思考に焦点を当てて、学びを豊かにするために有効な手だてを研究していく。そして、この学びを豊かにする聞き合いを通して、思考力・判断力・表現力が育まれていくと考え、4年次研究のめざす子どもの姿を以下のように設定した。

聞き合いの中で「関係づけ再構成」することによって考えが広がり深まったりする姿

3 聞き合いのために

4年次では、個の思考における関係づけ再構成に焦点を当てて手だてを講じていく。しかし、1～3年次の研究から聞き合いの中だけでなく、聞き合いへの心構えや子ども同士が共有しておくことなどが大切であることが分かっている。

そこで聞き合いに向かうための手だてとして、「子どもにつけたい態度」と「子どもに共有させておきたいこと」の2点を設定した。以下に詳しく述べていく。

(1) 子どもにつけたい態度

子どもにつけたい態度とは、教科等の求める聞き合いに対する心構えや考え方をさす。この態度は、聞き合いへの、原動力となったり、方向性を決めたりすると考える。子どもの向かう方向性が揃えば、聞き合いが活発になり考えを深めることができる。問題解決に向かって、見当をつけたり、学習活動を明確にしたりすることで聞き合いが有効に機能する。

(2) 子どもに共有させておきたいこと

聞き合いをするときに、事実や経験などが共有されていると、思いや考えが絡み合う。目的が正しく理解できる。また、「どんな視点に立って話をしていくか」がはっきりすると、話の位置づけが分かる。子どもに共有させておきたいことを単元や授業の中で教師が意識することが、聞き合いにとって必要になってくる。

4 学びを豊かにする聞き合いのために

関係づけ再構成する手だて

先に述べたように、関係づけ再構成するのは、聞き合いにおける個の思考である。集団としての聞き合いの活動は、一見活発に見えても個の考えが深まっているとは限らない。自分の考えと他の考えを関係づけ再構成することで、考えが深まるからである。まさにその場面に焦点を当てて、関係づけ再構成する手だてを講じていきたい。

(1) 関係づけ

関係づけとは、比較・分類などを通して自分の考えと他の考えとの関係をとらえることである。

- 比較（他の考えと自分の考えを比べ共通点や相違点を見出す）
- 分類（他の考えを自分の中で種類・性質・系統などに従って分ける）

教師は、子どもが比較・分類を使って、考えを関係づけられるように、思考の可視化を促したり、視点を示したり、グループ構成を工夫したりしていく。そうすることで、子どもは、他の考えをより理解し再構成に向かっていく。

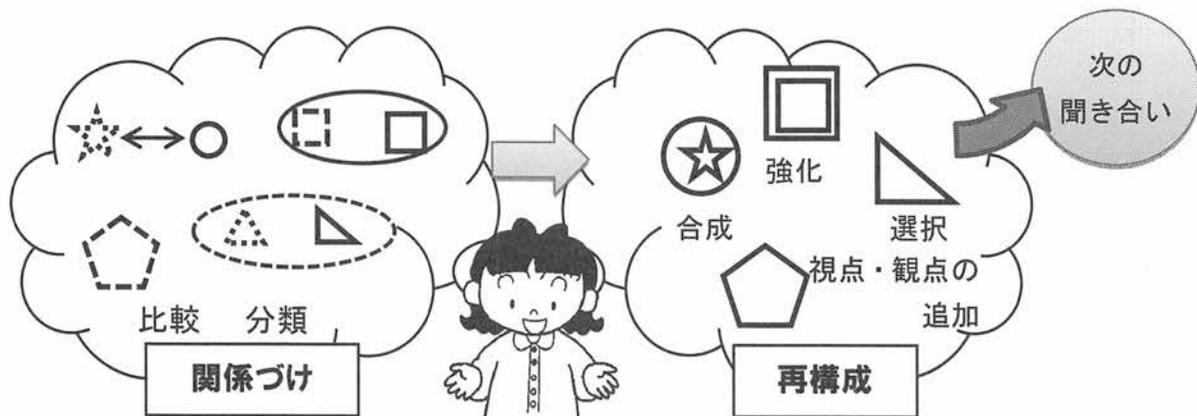
(2) 再構成

再構成とは、合成・選択などによって他の考えを自分の考えに反映させることである。関係づけから自分の考えと他の考えの違いが分かり、考えを改めたりそれまでに気づかなかったことを認めたりすることを再構成するととらえる。

本校では、再構成する手段には以下のものがあると考えている。

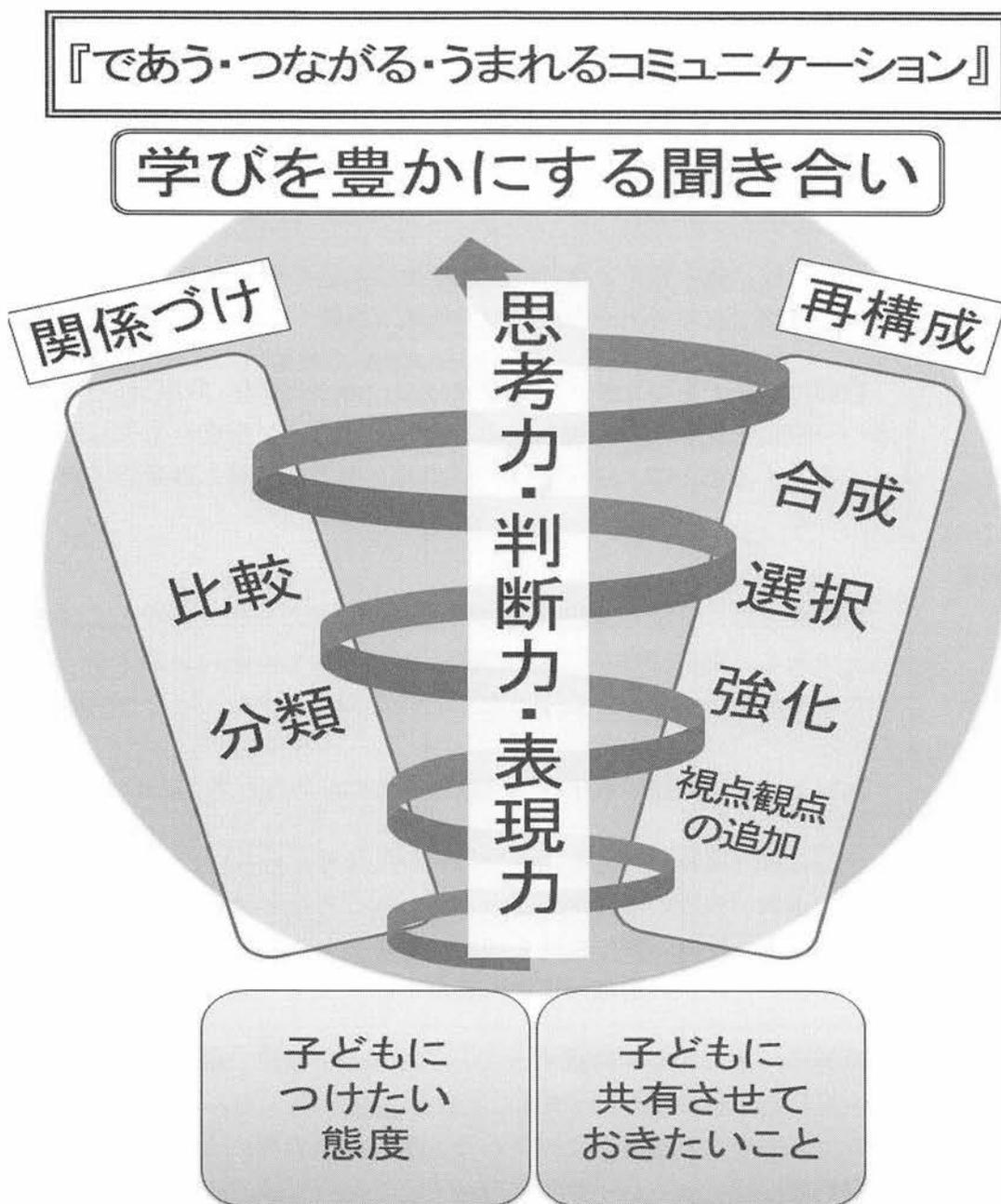
- 合成（複数の考えを組み合わせ新たな考えをもつ）
- 選択（複数の考えから妥当と思われる考えを選ぶ）
- 強化（理由づけや根拠を加え、考えをより確かなものにする）
- 視点・観点の追加（事物・事象を違う視点・観点でとらえ直す）

教師は、子どもが再構成することができるように、場を設定したり、言語化を促したりしていく。再構成した自分の考えは、「みんなはどう思うか」「他の人はどんなことを考えたのだろうか」など、次の聞き合いにつながっていく（資料2）。



資料2 関係づけ再構成の過程

5 研究の全体構想図



6 研究の取り組み

(1) 教科・領域別研究

4年次は、各教科・領域ごとに、ねらいに至るための「学びを豊かにする聞き合い」を明確に位置づける。それをもとに、関係づけ再構成する手だてを設定し、日々の授業を通して実践研究をしていく。その際、授業の中で自分の考えと他の考えをどのように関係づけ、どんな考えに再構成させていくのかを想定して、授業に取り組んでいく。

(2) 研究の方法

今年度の研究では、授業実践を通して以下のことについて検証を行っている。

ア ねらいに対して、聞き合いが有効に働いたか。

イ 聞き合いの中で関係づけ再構成する手だてが効果的であったか。

以上の二点については、研究授業後の事後研において、授業記録や抽出児（抽出グループ）記録などをもとに授業分析を行い、授業者と参観者で検討を重ねることで検証していく。

＝参考文献＝

本校研究紀要第64集から第66集

『問題解決のヒント！—ギャップを価値に変える対話術』 堀 公俊 同文館出版 2004

『共に創る対話力—グローバル時代の対話指導の考え方と方法』 多田孝志 教育出版 2009

『効果10倍の<教える>技術—授業から企業研修まで』 吉田新一郎 PHP新書 2006

『効果10倍の<学び>の技術—シンプルな方法で学校が変わる！』 吉田新一郎 PHP新書 2007